

「最も恐れているものからの救い」 ローマ 6：23

## I 導入部

おはようございます。10月の第一主日礼拝を迎えました。10月の最初の日を礼拝をもって始めることのできる大いなる恵みを感謝いたします。9月も神様の守りの中で過ごすことができました。9月に苦しみや悲しみ、痛みを経験された方々の上にも、変わらないイエス様の愛と恵みが注がれていたことを信じます。10月の月もイエス様が共におられて、お一人おひとりの歩みを支えて下さるようにお祈り致します。

今日は、ローマの信徒への手紙6章23節を通して、「最もおそれているものからの救い」と題して、お話し致します。

## II 本論部

### 一、私たちの人生には死はつきもの

先週、85歳の生涯を終えて天に召された船越兄の葬儀を行いました。聖書には、「人生の年月は七十年程のものです。健やかな人が八十年を数えても、得るところは労苦と災いにすぎません。」（詩篇 90:10）とあります。青葉台教会での最高齢は桜井姉でした。

世界最高齢は、1997年、122歳164日で亡くなられたフランス人の女性でした。日本人としての最高齢は、2015年4月1日亡くなられた大川ミサヨさん117歳でした。117歳の大川ミサヨさんに、「117歳まで生きて来られて、人生を振り返っていかがでしたか」と質問したら、「あっという間でした。早かった。」という感想が返ってきたそうです。

人生80年と考えると、睡眠や食事、トイレ、学校の勉強、会社での仕事、通学や通勤を合わせると45年ほどになるそうです。あと35年。物心がついて自分で考え、自分で判断して行動するには、5年から10年はかかるそうですので、本当に自由な時間は30年未満ということになるそうです。

80年の生涯、90年の生涯と言われますが、人生は案外、私たちが思っているよりも早いというのが現実なのです。私たちの人生はやり直しがききません。今の人生はあまりよくない人生だったので、今度生まれ変わったらよい人生を送ろう、というようにはいかないのです。人生は一度きりなのです。

私たちは、それぞれ命が与えられて生まれてきます。私たちは何のために生まれてきたのか。私の使命とは何なのか。考えたことはあるでしょうか。私に命を与え、誕生し、人生を委ねられた神様は、私に、あなたに、いったい何を期待しておられるのでしょうか。

私たちの人生、一度きりの人生になくってはならない大切なことは死に対する備えなのです。私たちは、神様に命が与えられて、それぞれの人生を送っていますが、必ず死を迎え

なければなりません。その死に対する備えが大切であり、その死の備えを聖書は私たちに示しているのです。

## 二、わたしは罪人であると認める

死は私たちを愛する者から引き離します。愛する者の死は大きな痛みです。船越兄を初めとして、最近亡くなられた方々のご家族は、その死によって、愛する者との別離のゆえに、悲しみと痛みの中にあるのです。しかし、聖書は死に対する勝利を語ります。

ローマの信徒への手紙6章23節を共に読みましょう。「罪が支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。」

前半には、「罪が支払う報酬は死です。」とあります。ここには、罪という言葉が出てきます。聖書の中で、的を外す（人間が神様の要求される意志から外れていることを意味する）という意味の、罪を犯すという動詞は旧約聖書の中には241回、新約聖書には43回、罪という名詞は、旧約聖書には297回、新約聖書には173回出てきます。聖書は、繰り返し罪を示し、罪からの救いについて記されているのです。

私たちは、「罪」という言葉を聞いて、見て、それぞれにイメージすることは違うかもしれませんが。聖書を読んで、罪、罪ばかりなので、自分を罪人呼ばわりして、と怒る人がいるかも知れません。自分は、まじめに生きているのに、なんだということです。

多くの人々は、罪というイメージは、法律の罪、犯罪の罪を思い浮かべる人が多くいるのだと思います。「私は法律を犯していない。違反などしていない。そんな私がどうして罪人なのか」ということなのです。しかし、聖書が言う罪は、神様から離れて生きること、神様を必要としない、神様と関係なく生きる、それで自分勝手に生きることを罪といいます。神様から離れている、つまり、的がはずれている、この的が外れているということを聖書は罪と言います。

ある人が、全身痛いという病いにかかったそうです。体の一部だけが痛くても、私たちはつらいのに、全身が痛む病気、耐えられない。病院に行って、先生が痛い所を指さして下さいと言われて、頭に指をつけて痛い、痛い、頬っぺたやあごを指さして、痛い、痛い、胸を指さして痛い、痛い、おなかにも指さして、痛い、痛い、腰もおしりも指さして痛い、痛い、太ももも足先も指さして、痛い、痛い、全身が痛い。どうしようもない。それで、精密検査をした結果、原因がやっと判明しました。人差し指が骨折していた。骨折していた指で、いろいろな所をおさえるので、頭も顔も、胸もおなかも、おしりも足も痛かったのです。問題は、全身にあったのではなくて、指にあった。その指を問題にしないと、問題でないところも問題となってしまったのです。

私たちの人生にとって、最も大きな問題は、人がどうかではなく、自分が神様から離れている罪人であるということを認めないことなのです。神様は、聖書を通して、全ての人は罪人であると宣言しているのです。私たちは、自分が罪人であることを認めたいのです。

## 三、神様の賜物としての永遠の命

私たちが、罪人であるならば、罪の支払う報酬は死なのです。私たち人間の中で死なな

い人はおりません。死ぬとするならば、私たちは罪人であるということが証明されるのです。私たちは、神様が見えない、神様を知らないということで、罪がわからないのです。神様は私たちの罪の姿を見て痛んでおられるのです。

私たちは、なぜ罪がピンとこないのかというと、客観的に自分の姿が見えない。神様の前に立たない限り見えないことなのです。神様というお方を意識し、この方の前に立つときに、自分に罪の自覚をうながすのです。イエス様の弟子ペトロは、イエス様のお言葉に従って網を打って大漁の経験をしたとき、イエス様を神様であると意識した時、イエス様の前に立った時、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです。」とイエス様の前にひれ伏したのです。自分が罪人であることを自覚したのです。

「罪が支払う報酬は死です。」新改訳聖書では、「罪から来る報酬は死です。」とあります。この罪がわからないと救いの必要性を求めないのです。救われたいとは思わないのです。罪は永遠の死後の裁きを呼び込んでしまうのです。

この罪の解決のために、神様はイエス・キリスト様を人間の世界に送って下ったのです。罪の解決がないままで死んだら、死、永遠の裁きなのです。しかし、神様は愛なるお方です。神様の本姓は愛なのです。その愛なる神様は、私たちを永遠の滅び、死という裁きを下すのを忍びなく、何とか救いたい、それが神様の愛の動機です。私たちに罪の赦し、裁きからの解放、復活の恵みを備えて下さったのです。

神であるお方、罪のないお方が罪ある私たちのために十字架にかかって尊い血を流し、命をささげ下されたのです。そのイエス様の流された血とささげられた命を通して、神様は私たちの全ての罪を赦して下さったのです。イエス様は、死んで葬られ、よみがえられたので、私たち罪ある者の罪を赦し、魂を救い、永遠の命、死んで終わりの命ではなく、死んでも生きる命を与えて下さるのです。

船越望兄は、死にました。85年という尊い生涯を送り、肉体の生涯を終えました。その死は、私たちにも大きな悲しみとなりました。けれども、船越望は、イエス様の十字架と復活を通して、永遠の命、天国の命を与えられて、神様のみもとに導かれたのです。船越望兄のゴールは天国、神様のふところ、永遠の命なのです。

### Ⅲ 結論部

「しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。」

私たち人間は、全ての者が罪人なので、罪の支払う報酬は、死なのです。罪のゆえに裁かれるのです。死ぬのです。けれども、神様のお心は、「しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。」 神様は賜物として、永遠の命を与えて下さるのです。

私たち人間は、死を恐れます。それは、神様を知らないことと、神様が与えて下さる賜物である永遠の命があることを知らないからです。神様はこの罪の赦しと魂の救い、永遠の命を私たちに与えたいと願っておられるのです。神様は、イエス様の十字架と復活を通して、私たちの最も恐れている死、罪に対する解決を与えて下さるのです。この週も、この愛なるお方を信頼して、全てを委ねて歩ませていただきます。